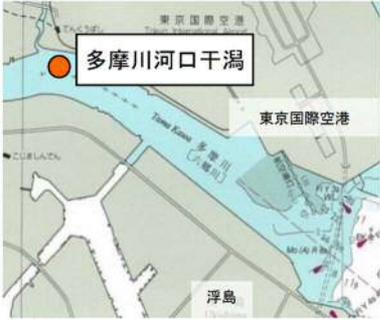


令和7年度 東京都内湾水生生物調査 5 月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和7年5月26日 8:42 ~ 10:17																												
<調査地点>		<底質状況・底生生物出現状況>																													
		 <p>多摩川左岸側(東京都側)の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。</p>																													
<table border="1"> <caption>水深(m) vs 水温(°C) / 塩分(-) / 酸素量(mg/L)</caption> <thead> <tr> <th>水深(m)</th> <th>水温(°C)</th> <th>塩分(-)</th> <th>酸素量(mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>1.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>2.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>3.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>4.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>5.0</td> <td>20.0</td> <td>10.0</td> <td>1.0</td> </tr> </tbody> </table>		水深(m)	水温(°C)	塩分(-)	酸素量(mg/L)	0.0	20.0	10.0	1.0	1.0	20.0	10.0	1.0	2.0	20.0	10.0	1.0	3.0	20.0	10.0	1.0	4.0	20.0	10.0	1.0	5.0	20.0	10.0	1.0	 <p>ふるい上にはヤマトシジミの貝殻片、腐植物片が多くのがかった。</p>	
水深(m)	水温(°C)	塩分(-)	酸素量(mg/L)																												
0.0	20.0	10.0	1.0																												
1.0	20.0	10.0	1.0																												
2.0	20.0	10.0	1.0																												
3.0	20.0	10.0	1.0																												
4.0	20.0	10.0	1.0																												
5.0	20.0	10.0	1.0																												
<p>底質の状況</p>  <p>底質はシルト分が主体の砂質であった。</p>	<p>試料採取の状況</p>  <p>干潟時に小型採泥器を用いて底質を採取した。</p>	<p>ヤマトオサガニ</p>  <p>干潟でよくみられるカニ。甲幅4cm程になり、柔らかく水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。</p>																													
<p>ムロミスナウミナナフシ</p>  <p>体長2cm程になる、フナムシに近い仲間。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。</p>	<p>ヤマトシジミ(死殻)</p>  <p>汽水域にのみ生育するため、河口域に生息するものは出水等の影響を受けやすい。今回は貝殻のみ確認された。</p>	<p>ミズヒキゴカイ科</p>  <p>砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、糸のような鰓と触手を水中に伸ばす。名前の由来は、鰓と触手を水引(祝儀袋等に用いられる飾り)に見立てたもの。</p>																													

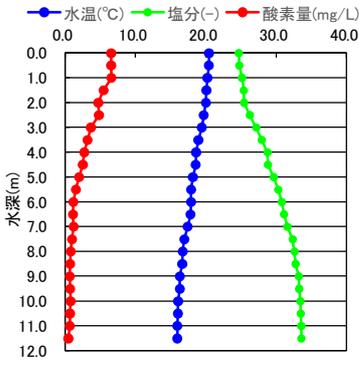
令和7年度 東京都内湾水生生物調査 5 月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和7年5月26日 10:35 ~ 11:44																												
<調査地点>		<底質状況・底生生物出現状況>																													
		 <p>羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、岸から歩いて入ることはできない。</p>																													
<table border="1"> <caption>水深別の水温・塩分・酸素量</caption> <thead> <tr> <th>水深(m)</th> <th>水温(°C)</th> <th>塩分(-)</th> <th>酸素量(mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>1.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>2.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>3.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>4.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>5.0</td> <td>~18</td> <td>~28</td> <td>~1.5</td> </tr> </tbody> </table>		水深(m)	水温(°C)	塩分(-)	酸素量(mg/L)	0.0	~18	~28	~1.5	1.0	~18	~28	~1.5	2.0	~18	~28	~1.5	3.0	~18	~28	~1.5	4.0	~18	~28	~1.5	5.0	~18	~28	~1.5	 <p>ふるい上にはアサリ等の二枚貝類の貝殻が多く残った。</p>	
水深(m)	水温(°C)	塩分(-)	酸素量(mg/L)																												
0.0	~18	~28	~1.5																												
1.0	~18	~28	~1.5																												
2.0	~18	~28	~1.5																												
3.0	~18	~28	~1.5																												
4.0	~18	~28	~1.5																												
5.0	~18	~28	~1.5																												
<p>底質の状況</p>  <p>底質はシルト分が主体の砂質であった。</p>	<p>試料採取の状況</p>  <p>底生生物をふるい分けの後、目視で生物をピックアップする。</p>	<p>ホンビノスガイ</p>  <p>成長すると殻長 10cm を超える外来種。貧酸素環境に耐性を持ち、現在では東京湾を代表する二枚貝となっている。貧酸素環境では硫化物によって殻が黒ずむ。</p>																													
<p>ミズヒキゴカイ科)</p>  <p>砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、糸のような鰓と触手を水中に伸ばす。名前の由来は、鰓と触手を水引(祝儀袋等に用いられる飾り)に見立てたもの。</p>	<p>アサリ</p>  <p>殻長 4cm 程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られる代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細く、模様のコントラストが強いものが多い。今回は小型個体が多かった。</p>	<p>ドロクダムシ科</p>  <p>体長 7mm 程になるヨコエビの仲間。腕のように見える大きな第二触覚が特徴。泥等で管を作り、そこに棲む。内湾等に多く出現する。</p>																													

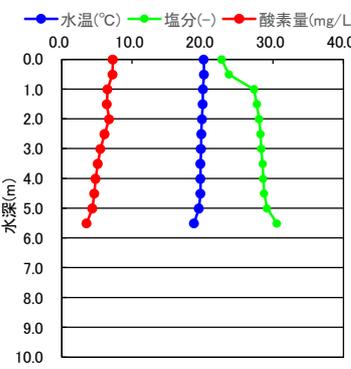
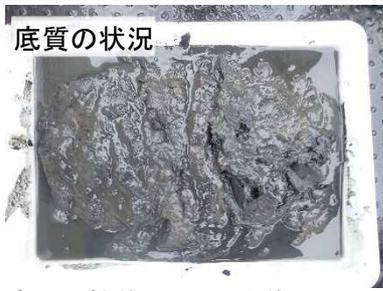
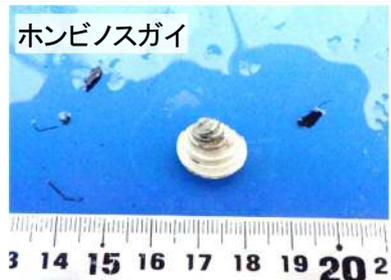
令和7年度 東京都内湾水生生物調査 5 月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	令和7年5月26日 12:19 ~13:15	
<調査地点>		<底質状況・底生生物出現状況>		
			<p>東京港フェリーターミナルの正面で船上から底質の採取を行った。航路であるため、水深は11.5m と深い。約 5.0m 以深は貧酸素状態であった（貧酸素状態：2.0mg/L 以下）。</p>	
			<p>ふるい上にはシズクガイ等の二枚貝類の貝殻が多く残った。</p>	
<p>底質の状況</p>  <p>底質の性状はペースト状のシルトで、表面は酸化状態であった。内部は黒色で還元状態であった。</p>	<p>水質測定の様子</p>  <p>水質の鉛直分布を測定器により計測している。</p>	<p>スピオ科</p>  <p>東京湾の内湾部で多く見られる多毛類の一種。同科には貧酸素環境に耐性があるシノブハネエラスピオなどが含まれる。</p>		
<p>シズクガイ(死殻)</p>  <p>半透明の薄く壊れやすい殻を持つ。貧酸素耐性があり、有機汚濁の指標種の一つとされている。</p>	<p>コウロエンカワヒバリガイ(死殻)</p>  <p>東京湾では代表的な付着生物となっている外来種。水質汚濁や塩分の変化に強く、港湾の防波堤や転石等に高密度に付着する。</p>	<p>ムラサキイガイ(死殻)</p>  <p>港湾の防波堤等に高密度に付着する。高水温や貧酸素化にともなう大量へい死により、水質・底質の悪化を引き起こすことがある。</p>		

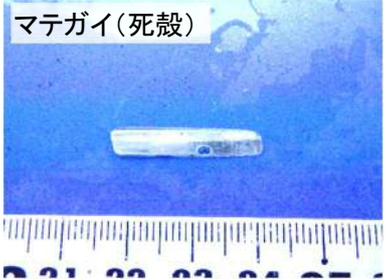
令和7年度 東京都内湾水生生物調査 5 月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲	調査年月日	令和7年5月26日 14:50 ~15:32
<調査地点>		<底質状況・底生生物出現状況>	
			
			
<p>底質の状況</p>  <p>底質の性状はペースト状のシルトで、表面は酸化状態であった。内部は黒色で還元状態であった。</p>		<p>試料採取の状況</p>  <p>船上から小型採泥器を用いて底質を採取した。</p>	
<p>アサリ</p>  <p>殻長 4cm 程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られる代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細く、模様のコントラストが強いものが多い。今回は小型個体が多かった。</p>		<p>チヨノハナガイ</p>  <p>内湾の泥底に生息する。殻は非常に薄いため、もろく壊れやすい。貧酸素状態でも酸素がある期間に短期的に発生する。</p>	
<p>スピオ科</p>  <p>東京湾の内湾部で多く見られる多毛類の一種。同科には貧酸素環境に耐性があるシノブハネエラスピオなどが含まれる。</p>		<p>ホンビノスガイ</p>  <p>成長すると殻長 10cm を超える外来種。貧酸素環境に耐性を持ち、現在では東京湾を代表する二枚貝となっている。</p>	

令和7年度 東京都内湾水生生物調査 5 月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31	調査年月日	令和7年5月26日 16:45 ~17:23
<調査地点>		<底質状況・底生生物出現状況>	
		 <p>多摩川河口から 1.5km 付近の浅場で調査を行った。水深が 2.4m と深いため、船上から底質を採取した。</p>	
<p>● 水温(°C) ● 塩分(-) ● 酸素量(mg/L)</p>		 <p>ふるい上にはアサリの稚貝が多く見られた。また貝殻の破片が残った。</p>	
<p>底質の状況</p>  <p>砂が主体でシルトが混じる。弱い硫化水素臭があった。</p>	<p>試料採取の状況</p>  <p>採取した底質試料の色を確認する。酸化還元状態の目安とする。</p>	<p>アサリ</p>  <p>殻長 4cm 程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られる代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細く、模様コントラストが強いものが多い。今回は小型個体が多かった。</p>	
<p>ホンビノスガイ</p>  <p>成長すると殻長 10cm を超える外来種。貧酸素環境に耐性を持ち、現在では東京湾を代表する二枚貝となっている。貧酸素環境では硫化物によって殻が黒ずむ。</p>	<p>マテガイ(死殻)</p>  <p>東京湾奥の干潟では普通に生息する二枚貝。成長する殻長 10cm 以上になる二枚貝。砂底に縦穴を掘って潜る。</p>	<p>ムロミスナウミナナフシ</p>  <p>体長 2cm ほどになるフナムシに近い仲間。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。</p>	